『我等、龍京警備隊！』

宇喜多広生

1

　ジエンディア大陸の中ほどにある嶮しい山岳地帯を抜けると、そこにかつては龍によって守護されていた伝説が残る龍京の都市が姿を現す。
　北には桃源郷アルカディアにも続く、あるいは神秘に一番近い都市かもしれない。
　龍京の中央の広間からシャオの奏でる二胡の調べが聞こえてくると、「ああ、龍京に辿り着いたのだな」と旅する冒険者たちは安堵の息を吐くのである。
「久しぶりにやってきたが、ここは相変わらずだな」
　やってきた一人の冒険者も、変わらずたたずむ街並みを見て微笑をこぼす。
　精悍な身体はこのジエンディアの大陸をくまなく旅してきた冒険者の証。
　日々様変わりしているエリアスなどに比べ、変わらずそこに在り続けてくれる龍京の街並みは日々旅し続ける冒険者や旅人にとって、とても安心できる場所であることを彼はよく知っている。それは彼がこの龍京で生まれ育ったからというだけではないことも、彼は知っていた。
　しかし、今日ばかりはいつもゆったりとした時の流れる龍京も、どこか言いしれぬ緊張感が漂っていた。
「なにか……あったのか？」
　その時ばかりは、彼のよく当たる予感が外れて欲しいと、そう思ったのである。

「……遅かったか」
　ジャンジー老師はよく整えられた白いあごひげを一撫でして残念そうにそう言った。
「まったく、あの子ったら話を聞くやいなや矢のように飛び出してったよ」
　そう老師に告げるのは龍京の名物食堂のおかみさんであるランティエである。
「行かなくていいのかい？」
「今さら老骨の出しゃばるモンじゃない。若い者に任せておくさ」
　そう言って提げてきた包みを見つめる。
「だからこそ……持たせてやりたかったのだが……せっかちな奴め……」
「カイのことかい？　あの子なら話を半分も聞かずに矢のように飛んでいっちまったよ……まったく……いったい誰に似たんだろうねぇ……」
　そう困ったようなそれでいて頬笑まし気な複雑な表情をするランティエ。この肝っ玉母さんの当面の困りごとは、カイの為に作った特性肉まんをどうするか、ということであった。
　……そこに。
　不意に……。
　扉が開いた。
　ランティエとジャンジーが同時に口を開き、目を見開く。
「あ、あんた……？！」
「お、お前は……」

　カイは走る。
　龍京の敷き詰められた石畳は、まるでカイの疾走を後押しするかのように素早く眼下を流れていく。
　カイは跳ぶ。
　龍京の嶮しい山岳を模したかのような高い建物群の、壁を、屋根を、跳び上がって駆け抜ける。
　カイは叫ぶ。
「ちくしょーっ！」
　龍京の外れにモンスターの大群が現れたという。
　その数は千を下らず、何よりこれまで龍京の周辺では見たこともないような異形のモンスターすら混じっているという。
　そのモンスター討伐のために、龍京警備隊の隊員に招集が掛けられたのである。
　未だ見習いである、カイを除いて。
　カイだってまだまだ未熟者の自覚はあれどいっぱしの冒険者だ。
　龍京警備隊の面々と比較してもそうそう劣ることはないのでは？　と思っている。
　というよりも、もうそろそろ正式に隊員に昇格させてもらえるんじゃないかとさえ思っているのだ。
　それが今回のこの扱いである。
　カイは悔しさを糧に龍京の大通りを掛け抜けた。
　やがて龍京の出入り口である大門が姿を表す。その門を抜ければ赤いさとうきび畑に出る。いつもは大きく解放されている大門だが、モンスターを警戒してか今日ばかりは固く閉ざされている。
「はぁーーーっ！！」
　気合いの掛け声とともに、カイは思いっきり助走をつけるため、さらに疾走を加速させ、一気に大門の屋根へと跳び上がる。
　出発した討伐隊は既に大門から遠く離れており、今や街道を外れようとしている。
「もうあんなところまで？！」
　カイは討伐隊の位置を確かめると、一気に大門から地面に飛び降り着地する。
　足に伝わる衝撃をバネにして、レプレゼ雪原のケモノプリリンのごとくに飛び出したカイは全力疾走で討伐隊に追いついた。
　先頭を行くのは肩に背負った大長刀、腰には大振りのヒョウタンをぶら下げた長髪を首の後ろで三つ編みに編んでいる大柄の偉丈夫、バン隊長である。
「カイ！？　なぜ来た？」
「俺だって龍京警備隊の一員です！　なんで招集がかからなかったんですか？」
「お前はまだ見習いだ。今回の敵は荷が重すぎる」
「見習いだって、警備隊の一員です！」

「……知ったようなことをぬかしやがる」
「足手まといにはなりませんから！　連れて行ってください！」
「勝手にここまでついてきやがって、連れて行けも何もないだろうが……」
　とバン隊長は口の中で苦虫を噛み潰して呟いてから、長刀の柄でトントンと筋肉で盛り上がった肩を叩いてこう言った。
「くれぐれも足手まといになるんじゃねーぞ」
「ならないって言ってます！」
「まったく……生意気な奴め！　負けん気の強さは兄貴譲りか？」
「兄さんは幼い頃に別れたきりですから……」
　カイには年齢の離れた兄が居る。彼は冒険者となる為に龍京を旅立っていったのは八年も前のことだ。カイもいつか兄のような冒険者になりたいと思っている。今はこの龍京を守る警備隊で修行を積む日々である。
「兄さん……今は大陸のどの辺りを冒険しているのだろう？」
　そんなどこにいるのかわからない……もしかしたら、案外近くに居るのかもしれない兄に思いを馳せて、カイは討伐隊の隊列に加わった。

「相変わらず言い音色だな」
　シャオの奏でる二胡の弦がピタリと、奮えるのをやめた。
「その音を聞くと龍京に帰ってきたって気がするよ」
「……風の噂で聞きました……良いお仲間に巡り会えたみたいですね」
「あんたの導きのおかげだ」
「わたしは何も……イリスの導きでしょう」
「俺は見たこともないイリスなんて少女のことよりも、あんたの言葉を信じるよ」
「そんなことを言う為に、わたしの演奏を止めるのですか？」
「ははっ、相変わらずだな……久しぶりに近くまできたもんだから、昔馴染みの顔を見に来ただけさ」
「それは……時期が悪かったようですね」
「いや、まぁ飾る錦にゃちょいと物足りないが、弟の顔を見るついでだ。龍京の危機を救う手伝いでもさせてもらえるんだ……良い機会さ」
「なら、急がれた方がよろしいのでは？」
「その前に、シャオさん。あの歌を聞いて行きたいのさ」
「……」
　シャオは無言で二胡を持ち、その弦を振るわせ、その美しい声で歌いはじめた。
　それは太古の昔、かつてこの土地を守護する龍と、共に戦った戦士の歌物語……。

　しばらく森を進んだ隊列に、モンスターの牙が襲いかかる。
　ボトボトと、森の木々の枝から、毒虫のように落ちてくる。どのモンスターも龍京の周辺では見たこともないようなものばかりだ。
　どこか毒々しい異形の物ばかり。
「総員！　武器を取れ！　一匹たりとも逃がすなよ！」
　バン隊長が大長刀を振るう。その一振りで何匹ものモンスターが文字通り一刀両断されていく。
「おお！」
　全員の頼もしい声が帰ってくる。無論、カイも負けじとその声を張り上げた。
　シールダーであり、拳士であるカイはその拳を振るって敵を屠る。
「せいやっ！」
　半月牙を手に絶え間なく拳を突き出し、蹴りを放つ。
　ようやく弱りだしたところに渾身の一撃を叩き込む。そうしてやっと一匹の奇怪なモンスターを仕留めることが出来た。
「せぇいっ！　やぁっ！！」

　いくつもの連撃を重ねてやっと仕留めるカイに対して、他の隊員たちは一撃やコンボの中で数匹を屠っていく。
　カイは自分の力量不足を今ほど恨んだことはなかった。
「カイ、無理はするな！」
「大丈夫です！」
　バン隊長の声に呼吸を整え返事をすると、気を放った。気弾は飛びかかってきたモンスター数匹を防ぐ。吹き飛んだモンスターたちに蹴りを放って追撃する。
　いくら屠っても、仕留めてもきりがなく、際限なくモンスターは現れては襲いかかってくる。
　同じ種類のモンスターなら同じ特性で攻撃の仕方も単調で済むが、現れるモンスターはどれも種類が異なっている。倒せば倒すほど、また毛色の違うモンスターが現れ、警備隊は次第に窮地に立たされる。
「退くな！　怯むな！　儂らの背後には龍京があるのだ！　ここを突破されれば終わりと思え！」
　バン隊長が檄を飛ばす。しかし返ってくる声はまばらで、誰もが肩で息をしている。
　既に数百のモンスターを仕留めているはずだが、モンスターたちの勢いは止まらない。
「アイシクルレイン！」
　数人の弓使いのレンジャーたちが一斉掃射することによって、ようやくモンスターの波が途絶えた。
「隊長！　森の中での戦いは不利です！　ここは退きましょう」
　バンに対してそう言うのはユエである。
「馬鹿者ぉっ！　ここで退けば奴らはさらに増長するぞ！　聞こえるだろ？　既に勝ち誇ったような奴らの声を？」
「しかし……！」
「いや、バン隊長の言う通りだぜ。先刻は不意打ちで劣勢を強いられたが、今なら陣形を整えて対応することが可能だ」
　ティムと比べて好戦的なジャコウはここでモンスターを迎え撃つことを主張する。
「退いたところで劣勢は変わらない……ここは少しでもモンスターの増長を押さえるべき」
　普段無口なマジシャンのメイホアもそう発言した。
「無論、我々だけで、奴等を殲滅することは不可能です。ここは足留めに徹して、援軍到着と同時に広い場所までおびき出して一気に叩くのが得策かと」
　と参謀役にしてマジシャンのレイジもそう言った。
「いつ来るかもわからねぇ援軍頼みかよ」
　ちっと舌打ちするものの、どこか楽しげなジャコウは大剣を振って既に戦闘態勢に入っている。
「敵さんもどうやらやる気まんまんみたいね」
　そう言うのは先ほど掃射を指示したレンジャーの少女ミンファである。
「カイ、少し回復しなさい」

　そう言ってポーションの瓶を渡される。
「くれぐれも無茶したらダメだよ？」
「わかってるよ……」
　そう言ってポーションをぐいっと空ける。疲労感が少し回復し、手にした半月牙を合わせてキンキンと音を立てる。半月牙を握りしめる手が、カイにまだ行けると実感させてくれる。幼い頃から積み重ねてきた修練の賜物か、この過酷な戦場の中にあっても身体は言うことを聞いてくれる。
　あとは俺の精神（こころ）だ。
　そう自分に言い聞かせて気合いを入れる。
「さぁ、モンスターどもに目に物見せてくれようぞ！」
　と言ってバン隊長は腰のヒョウタンを少しあおる。
　バン隊長の腰のヒョウタンには強い酒が入っていることは隊員の誰もが知ることである。
　隊長曰く、少し酒が入っている方が調子が出るとのことだ。
「隊長、飲み過ぎないようにお願いしますね」
　その隊長の姿に顔をしかめるのはユエである。
「やかましい！　こんくらいの酒、気付けにもならん！」
「しかし、隊長が酔拳をマスターしているなんて誰も聞いたことがありませんよ？」
「う、ぐ……」
「若い隊員がマネすると困りますから、ほどほどにしておいてください」
「来ます！」
「迎え撃つぞ！　まずはありったけの矢を喰らわせてやれぇい！」
「はい！　行きます！　アイシクルレイン！」
　ミンファの号令と共に数人の弓使いが矢を放ち広範囲のモンスターを打ち貫いた！
「行くぞ！　龍京警備隊の力ぁ、見せつけてやれい！」
「応！」
　隊長の号令の元、各々が得物を手に駆け出す。
　ジャコウは大剣を振り回して並み居るモンスターを嬉々として刻み込んでいく。
「オラオラァッ！　どけどけ、どきやがれぇっ！」
　粉塵巻き上げて突貫し、粉砕する。
　しかしいくら倒してもきりがない。
「ダメですよ、隊長！　埒があきません！」
「おのれぇ、たかが数千のモンスターごときにここまで押されるとは！」
　ユエの言葉にバン隊長の歯がぎりぎりと悔恨の音を立てる。
　いつしか、隊は森の出口付近まで戦線を後退せざるを得なくなっていた。
「しまった！　まさかここまで押されていたとは！」
「そんな！もうすぐ森を抜けるなんて！」
　背後には赤いとうもろこし畑の明るい光が迫っている。

　街道に出れば龍京の大門は目の前だ。
「てええええやああっ！」
　気合いの声と共にカイはモンスターにダメージを与え続ける。
　しかし、気持ちが焦っているのか、込めた気合いほどにダメージを与えられない。
「カイ、後ろ！」
　ミンファの叫び声がする。
　倒したと思っていたモンスターがカイの背後から飛びかかってきたのだ。
　慌てて振り向いた時には、モンスターはカイの目の前に迫っていた。
　拳を交差させ、防御しようとするが、戦いの疲れからか動作が一瞬遅れた。
（マズい！）
　死すら感じたその瞬間……カイの背筋にヒヤリと寒い何かが奔った。
　稲妻、奔る。
　まさに雷光一閃のような一撃がモンスターに打ち込まれた。
　それだけではない。
　その両の手から放たれる凄まじい気。
　拳士の上級のジョブ、モンクの操る気の奔流に、並み居るモンスターたちはことごとく吹き飛ばされていった。
「よお、兄弟！」
「にい……さん……？」
「ああ、やっぱりカイだ。大きくなったな。一瞬わからなかったぜ」
「兄さん？　ホントにクレイ兄さん？」
「ああ、なんだよ、そんなに疑わしいかよ？　ほらちゃんと足もあるぜ？　幽霊じゃないんだからよ。そんなに驚かれても困るぜ」
「その軽口……ホントに兄さんだ……」
「クレイか？　帰ってきたのか？」
「久しぶりだな、バンさん。ホントは少し立ち寄っただけなんだけど……時期が悪かったみたいだな」
「いや、何より心強い援軍だ」
「なら存分に手を出させてもらうぜ」
「お前からすれば取るに足らない相手だろうがな」
「そうでもないさ。敵は数千のモンスター！　相手にとって不足なし！……てな！」
「兄さん！　僕も戦いますよ！」
「おう！　どれほど強くなったのか、見せてみろ！」
「もちろんです！」
　八年間思い焦がれていた兄との再会は、カイの失われた気力を一気に充填させていた。
「ジャンジー老師からだ。使え」
「こ、これは？！」

「少し早すぎるかもしれねえが、お前なら使いこなせるだろう」
　それは鉄扇であった。使い込まれて所々に傷が見られる。それでもその鉄扇が長い間、使い込まれていたことが感じられる。
「老師のお古だとよ……ありがたく使わせてもらいな」
「ジャンジー老師の得物をもらえるとはこれ以上ない誉れだぞ、カイ」
「はい！」
　そのずしりとした重みを両手に感じるのは、なにも重さだけではないだろう。
　カイは老師の鉄扇を手に構えてみる。
　まるで初めて持ったとは思えないほど手に馴染む。
「これなら……いけます！」
「よし！　なら一気に片付けるぞ！」
「ハイ！」
　クレイの頼もしい言葉に、気合い新たにカイたちは攻撃に転じていく。

「はぁっ！」
　裂帛した気合いと共に鉄扇を振るえば、雑魚モンスターは一撃で粉砕される。半月牙などとは破壊力が数段に違った。
「やるな！」
「まだまだです！」
　カイは既に肩で息をしているというのに、クレイはどこか余裕綽々な様子で、今にも鼻歌でも歌い出しそうな軽さで、モンスターを葬っていく。
　その時。
　ズン！
　大地を揺るがす音がした。
　そのご、ミシミシミシッ！　と木々の踏みつぶされる音がした。
　見上げれば。
　森の木々を踏みつぶすほどの巨大なモンスターだった。
「なんだこいつぁ？！」
　天空を覆うかのような巨大なモンスターの出現にさっきまで余裕だったクレイすら、その表情を強ばらせた。
「なんだってこんなモンスターがここに来ていやがるんだ？」
　かつて探検したピラミッドの奥にある異次元空間。そこでみた巨大な恐竜ですらここまでのサイズはなかった。
「ボスの登場に有象無象のモンスターたちがにわかに活気づいてきやがった」
　肩で息をしながらジャコウは吐き捨てるように言った。
「こんな大きなモンスター、なにか攻略方法はあるのか？」
　バン隊長に問われたクレイは周りを見渡す。
「……」
　どの顔も長い戦いに疲れ果て、矢は尽き、剣はその切れ味を無くしている。
　そんな者たちにただ相手の体力が無くなるまで攻撃し続けることを告げるのは残酷すぎた。
「どんな相手だって関係ありません！」
　そう声がする。クレイはかつて幼かった泣いてばかりだった弟の顔を見た。
「どんな相手だって関係ありませんよ！　龍京の平和を脅かす存在にはみんなで攻撃あるのみです！　だって……」
　それがいかに無謀なことなのか、誰もがその言葉に疑問を抱いたその瞬間、カイは言葉を続けた。
「……だって俺たちは『龍京警備隊』なのですから！」
　ふ……。

　バン隊長か、ジャコウか、クレイか。
　誰かの鼻が笑みの吐息をこぼした。
　もしかしたら三人同時だったかもしれない。
「そう……だな……」
　クレイの言葉にその場に居た全員が頷く。
「よく言った！　それでこそ俺の弟だ！」
「はい！」
「しかしクレイよ。あのデカブツはどうする？　いくらお前が居ても手こずるぞ？」
　その時、クレイの眼にある者の姿が映った。
「……大丈夫だ」
「何ぃ？」
「仲間が来てくれたからな」
　キィンキィンキィンキィン！
　澄んだ金属音が奔る。
　その瞬間！
　二條の刃が光を放つ。
　光が一つ閃けば、モンスターの一群が吹き飛び、澄み渡る金属音が鳴り響けばヒトの数倍もあるモンスターが真っ二つに裂かれる。
「少しの里帰りにしては遅いと思ったが、こんなところでなにをしている？！」
　そう言ってモンスターを薙ぎ倒して現れたのはアオイチ風の衣装に身を包んだサムライブレイダー。『閃刃』の異名を持つ剣士ムラクモである。
「すまねぇ、すぐに戻るつもりだったんだが、ご覧の通りでよ？」
「龍京が危機なれば我が故郷のアオイチも危険に変わりなし！　なぜすぐに呼ばなかった？」
「や、だからすまねえって……」
「ムラクモ殿は……呼ばれなかったことを怒っている」
　そう声がする方向を見れば、今まで何の気配も無かった場所に一人の忍者風の男が立っていた。
「い、いつの間に？！」
　警備隊の者たちは自分たちの目を疑う。
「ムラクモ殿のパートナー、忍者カツラギ……その姿は誰の目にも留まることはないという……噂には聞いたことはあったが実物を見たのは初めてだ」
　バン隊長ですらそう言って驚いている。他の隊員やカイなどは言うまでもなく、驚くというよりもむしろ何が起こっているのか理解が出来ていない。
　その時。
　キュインキュイン！
　魔力が集まる気配に警備隊の魔法使いたちが気がついた。
「アタシを忘れてもらっちゃ困るわよ！」

　幾重もの炎が、まるで意志を持つかのようにモンスターの布陣のど真ん中を切り裂く。
「ははは っ！　こりゃあ派手でいいねえ！　ティムリー」
「バカ！　あんたがのんびりしているからでしょうーがっ！」
　ティムリーと呼ばれた魔法使いの少女はゴシックのひらひらしたドレスを着ていた。
「な……」
　カイは初めて上級職業の戦いぶりを目の当たりにした。
　龍京の動きやすさを重視した揃いのファッションではなく、どこかきらびやかで、華やかで、何より、彼らの一挙手一投足の一つ一つまでもが洗練されている。
　ただ一つの技を繰り出すだけでも、眼と心が奪われるほどに鮮烈で美しかった。
（いつか……）
　胸の鼓動が速く、高く、強く、鳴っているのがわかる。
（……いつか俺もこんな風に戦ってみたい！）
　一撃一撃が強力な必殺技を放ち、無駄な動きの一切無い連続コンボを叩き込み、幾重にも群がるモンスター群などなんのその で突き進む、頼もしき冒険者に……。
（そして……）
　カイは眼を閉じ願う。
（この龍京を、あらゆる厄災から守って見せる）
「望むなら目指せよ」
　カイの心中を察したのか、クレイはカイの肩にポンと手を置く。
「目指せばいつか到達するってな……例え目的地とは違うかもしれねぇが、どこかには到達するってな」
　見上げた兄の顔は昔と何一つ変わらない、無邪気なまま、どこか照れくさそうに鼻の頭を指で掻いていた。
「へっ……」
「兄さん」
「って一のはシャオの受け売りなんだがな」
「シャオさんの？」
「ああ……かつては俺もその言葉を聞いて旅に出た」
「そうなんですか？」
「ああ……そして……仲間と出会った」
「今じゃかけがえのないパーティーさ。誰一人欠けても、このパーティーは成り立たない」
「よかったですね、兄さん」
「ああ、だが、お前にもいるだろ？」
「え？」
　そう言ってカイは周りを見渡す。
「あ……」
　見渡せばいつもの龍京警備隊の面々が見える。

「まずは、みんなであのモンスターどもを追い払おう！」
「そうですね」
　カイの声に警備隊の面々は静かに、しかし力強く頷いた。

「あの巨大モンスターは我々が引きつける！　貴殿らは大群の掃討を頼む」
「疲れているところをすみませんが、もう一踏ん張りです」
　そう言ってゴシックソーサラーのティムリーは全員に回復魔法を与える。
「行くぞ！　龍京警備隊総力戦だ！」
　今日、何度目かのバン隊長の気合いのこもった、少し酒臭い檄が飛んだ。
　同時に散開していく隊員たち。
　気力振り絞り、矢尽き、剣折れるまで、いや、例え矢が尽き剣が折れても心折れぬ限り戦い抜く覚悟で全員がこの戦いに挑み臨む。
「さぁ、我等もゆくぞ」
　と閃刃ムラクモが、まさに戦陣を切る。
　カツラギは既に姿無く、攻撃に移っているのだろう。
　クレイは気合いを込めて巨大なモンスターに向かって疾駆していった。
　そんな兄に、八年ぶりの再会を果たした兄に対して、「気をつけて」の一声もかけられなかったことが、カイをなぜか不安にさせた。
　それは、この戦いの中に在り、自分がいかに力量不足で役に立てて居ないかを理解してしまったが故の寂しさからくるのかもしれない。
　目の前には数百匹のモンスターの大群。
　倒しても倒しても、蹴散らしても蹴散らしても、奴等は現れては襲いかかってくる。
　この中で一番モンスターを倒せていないのは自分だ。
　その差が歴然とそこに現れてしまっていた。
「でも！」
　それでも！
　カイは声を大にして叫びたかった。
　しかし、声は出ない。
「それでも、俺はこの街を……龍京という街を……！」
　守りたい。
　だからこそ警備隊に志願した。
　だからこそ、ジャンジー老師の厳しい修行にも耐えた。
　だが！
　自分は非力だ！
　こうまでも力量の差という物を見せられれば認めるしかない。
　認めたくはなかった。
　心のどこかで、もっと出来ると思っていた、信じていた。
　疑いたくはなかった。
　自分の可能性を。

　疑ったら終わってしまうと、そう思っていた。
　その時がこんなに早くに来てしまうとは思っていなかった。
　それでも。
　まだ夢は捨てきれない。
「望みがあり、それを求め望むのなら、目指しなさい」
　そんな声がどこかから聞こえてきた気がした。
「……誰？」
「目指せばいつかはたどり着きます」
　不意に……。
　カイの脳裏に見たこともない銀髪の少女の姿が浮かんだ。
「まさか……あなたが……イリス？」
　次の瞬間、カイの耳にも脳裏にもその少女の声も姿も消えていた。
「俺の……」
　カイはモンスターに一撃を喰らわせて叫んだ。
「俺の、望みは！　この龍京を守ることです！！！！」
　その言葉をはっきりと口に出した瞬間、まるで身体が軽くなったような感覚をおぼえた。
　全身に力という力がみなぎり、五感のすべてが恐ろしく研ぎ澄まされたかのように、戦場に立つ者たちの息遣い、戦況までもがまるで側にいる様に感じられる。
　熟練冒険者の兄クレイたちの動きもわかる。誰の目にも留まること無いという速度を誇る忍者カツラギの所在さえも理解できてしまう。
　その巨大なモンスターを相手に、最強パーティーと思われるクレイたちでさえ苦戦を強いられていた。
「うおおおおおおおおおっ！」
　カイは雄叫びを上げる。
　それは大地と大気を震わせる大音声となり、その声は龍京にまで響いた。

「カイ……」
　ジャンジー老師はその気の主が誰かわかったようだ。
「なんという大きな……それでいて清々しい気でしょう」
　シャオも二胡を止めて、空を見上げた。

「はぁあああっ！」
　拳を構えれば、かつて無い波動が全身を包む。
　かつて、この地を守護したドラゴンが、力を貸してくれているのだと、頭のどこかで冷静に理解し始めている自分が居た。
「ならば！」

　攻撃の対象を巨大なモンスターにさだめる。
「太古のドラゴンよ！　我に力を！」
　気功波の要領で両の腕を前に突き出す。
「はあああああっ！！！　激龍咆吼波ーーーーーーーーっ！！！！！」
　大地から大気から、天と地の気を融合した巨大な気の奔流がモンスターを貫いた。
「やった！」
「バカな！　なんという巨大な気を操る！？」
　閃刃ムラクモの驚きの声をあげる。
「ち、手柄を弟に取られちまったか！」

　ほどなく、龍京警備隊の援軍が到着し、主たるモンスターを失ったモンスター群など烏合の衆も同然であり、今回の騒乱は沈静化した。
　カイは技を放つと同時に気力を使い果たして気を失った。
　兄のクレイはそのまま仲間と共にアオイチへと向かったという。
「また会おうぜ、弟よ」
　と一言だけをバン隊長に託して。

　それからしばらく後。一人の少年が冒険者として、この龍京を旅立つ。
　その後、龍京警備隊に、『龍の気を纏った神拳士』と呼ばれる英雄が登場するのは、まだしばらく先の話である。

『我等、龍京警備隊！』

http://p.booklog.jp/book/27255

著者：宇喜多広生
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/yuuki-kei/profile

発行所：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/27255

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/27255